

## 義父の介護が教えてくれた 「感謝と親孝行」

熱海教会 山口京子さん

認知症を患っていた義父は、日常生活の介助を拒むため、汚物まみれの部屋で一日を過ごすことさえあり、その掃除を一手に担うのが山口さんだった。ある人に相談すると、「お義父さんとのこれまでを思い出してみよう」とアドバイスされる。脳裏に浮かぶのは、実母が亡くなったとき一緒に泣いてくれた姿や子どもたちを可愛がり、毎日のように絵本を読み聞かせてくれた姿——義父の深い愛情に思い至る。介護をしているからと上から目線で義父を見て、非難し、あたたかな言葉をかけることもなかった。悔悟の気持ちが湧きあがり、親身に接すると、義父の表情は和らぎ、介助も素直に受け入れてくれるようになった。山口さんはそのとき、「自分が変われば相手が変わる」という仏教の縁起の教えが実生活に生きていることを実感した。義父は平成30年6月に世界。山口さんはいま、「じいちゃんが存在が私に感謝や親孝行の大切さを教えてくれた」と感じている。



## 「励まし」と「精進」

信仰の世界では、よく神仏に「救われる」といういい方をします。仏教でいえば、仏が私たちを救ってくださるということです。ですが、それは、単に「救い」を待っていればいい、という意味ではなさそうです。

法華経の「化城論品」に、「能く三界の獄より諸の衆生を勉出したもう」という一節があります。「勉出」とは「すすめて、励ます」ことです。本会の開祖・庭野日敬は、「仏さまは、苦しみや悩みに満ちている世界(獄)から、無条件に出してくださるのではなく、教えによって真理を知らせ、そこから出ることを励まします。すすめてくださる」と解説し、「教えにもとづくみずからの努力によって、苦悩の世界から出ていかなばならない」と明言しています。

また、「化城論品の結びの二節に、「仏を供養する功德を、多くの人びとに回向(差し向け)て、みなともに仏の境地に達したい」という言葉があります。これを私たちの生活にそって読み直すと、意外なほど身近な精進が浮かびあがります。「家族や友だちをはじめ、ふれあう人には、いつもやさしくしよう。朝夕のご供養とおして、自分の心と行ないを見つめよう。そうして多くの人の善き縁となり、善き友となつて、子どもにもほんとうの幸せを味わおう」

仏からの励ましを受けて実践する「みずからの努力」とは何かを考えるとき、このような大きな願いにもとづく身近な精進が、真つ先に思い浮かびます。

# 立正佼成会